

統語的複合語「Xスギル」⁽¹⁾ について

近藤 研 至

0 はじめに

現代日本語において、動詞「過ぎる」はほかの語と（それに後続する方法で）結合し、多くの複合動詞を生産する。

- (1)a 彼は働きすぎた。
- b 君は走りすぎた。
- c 彼女は彼を誉めすぎた。
- d トヨシマはミユキにプレゼントをあげすぎた。

(1)に見られるように動詞に後続するだけでなく、

- (2)a 彼女はかわいすぎる。
- b 今年の正月は暑すぎた。
- c 最近本当に寂しすぎる。

というように形容詞（の語幹）にも後続するし、

- (3)a ジョンソンは元気すぎる。
- b この餡、ゆるゆるすぎるよ。
- c トヨシマは幸せすぎる。

というように形容動詞（の語幹）にも後続する。「過ぎる」は、複合語形成においてかなり生産性の高い語である。

しかし、次のように名詞に後続させたとき、その生産性はかなり低くなる。

- (4)*本すぎる・*犬すぎる・*足すぎる

現在、「動詞+過ぎる」についての記述として最も高みにあると言える由本(2005)では、(4)のような「名詞+過ぎる」については、その形態があるという指摘すらしていない。日本語の複合語形成において、名

(1) 小論では、「動詞+過ぎる」は「Vスギル」と、「形容詞語幹+過ぎる」は「Aスギル」と、「名詞+過ぎる」は「Nスギル」とそれぞれ表示する。なお、前項について品詞を限定しないで述べる場合は「Xスギル」と表示する。なお、複合語を形成する「すぎる」の部分を取り上げるときは、「スギル」と表示する。また、具体的な語として取り上げるときは「走りすぎる」「かわいすぎる」「田舎すぎる」というように、「すぎる」の部分はかな書きにする。

詞+動詞という結合はかなりの生産性が高い方式なのに、さらにスギルを後項にもつ複合動詞では、前項は「名詞形」（動詞なら連用形、形容詞・形容動詞なら語幹）をとるにもかかわらず、なぜ名詞の場合にはこれほどまでに制限されるのだろうか。

小論では、AスギルとNスギルの観察から、複合動詞XスギルにおいてXにたつ要素の性質と、スギルの役割についての考察を試みる。

1 Vスギルについて

複合語の語形成論として、影山太郎の一連の研究は、それまでの研究を大きく前進させた。影山の優れた成果は複合語研究の広い範囲に散見するが、小論にとって重要な指摘は、複合動詞に語彙的複合動詞と統語的複合動詞があることを指摘したことである。語彙的複合動詞は「忌み嫌う」や「飲み歩く」などで、前項と後項全体で一単語であり、二つの要素を分解して取り扱うことはできないし、統語構造上、補文構造をもたない。そして意味的な整合性がかなり重視されるため、その組み合わせには制限がある。それに対して統語的複合動詞は「読み始める」「読みかける」などで、全体として一単語として機能しているのではなく、統語的な補文構造を持っており、かなり生産性が高く、また、意味の透明性が高い。同じ「過ぎる」によって形成されている複合動詞でも、(5)は「過ぎる」の語彙的意味が残る語彙的複合動詞であり、(6)は語彙的意味が欠如しており統語的複合動詞である。

(5)a 列車は北千住駅を通り過ぎた。

b 子どもたちが目の前を走り過ぎた。

(6)a カナスギはずるい態度をとりすぎた。

b ミユキはスピードを出しすぎる。

由本(2005)は、統語的複合動詞のVスギルを取り上げ、統語と意味の側面から非常に緻密な記述をしている。Vスギルが現れる文において、補部に格付与を行うのはスギルではなくV1である。

(7)a ミユキは唐揚げを食べすぎた。

b ミユキは図書館で寝すぎた。

c ミユキは冬籠りの前にお腹に食べ物を入れすぎた。

など、「唐揚げ」「図書館」「お腹」に対する格付与は、それぞれ「食べる」「寝る」「入れる」によってなされている。そうした現象を抑えた上で、由本は、スギルはほかの要素に「過剰」の意味を付加する機能を持つとしている。ただし

(8)a *ミユキはホルモン屋に着きすぎた。

b ミユキはホルモン屋に早く着きすぎた。

のように、単一の動詞の場合 ((8)a) では容認されないが、修飾要素があれば((8)b)容認されるなど文脈によって容認可能になるという場合も多く、V スギルはかなり生産性が高いと指摘している。こうした「過剰」の意味が付加されるには条件がある。それは[+gradable]⁽²⁾素性をもつ要素ターゲットの必要性である。すなわち、(8)において a は容認されないが b ならば容認される理由は、b には「早く」があることで[+gradable]素性をもつ要素があるということになる⁽³⁾。

また「過剰」の付加は、スギルが統率する要素全体に対して行われるとされる。

(9)a 彼は働きすぎる。

b ミユキは料理を食べすぎる。

c トヨシマは茄子を早く焼きすぎた。

a の場合は「働く」に、b の場合は「料理を食べる」に、c の場合は「早く焼く」に、それぞれ「過剰」の意味を付加するとされる。

以上のような記述を重ねて、由本は次のようにまとめる⁽⁴⁾。

「過ぎる」のターゲットとしては、まず、統語構造上に顕在的に現れている要素の中で[+gradable]素性が探される。

それが、「過ぎる」に統率されるものならば、そこに選択素性が満たされ、その要素に過剰の意味が付加される。

もし、統語構造上それが見つけられない場合には、最終的に複合する V1 がそのターゲットとして選択される。その結果、今度は、V1 の LCS⁽⁵⁾ 内で語彙的解釈メカニズムにもとづいた解釈が行われる。

確かにこの由本の説明は、V スギルについて言えばかなり説得力のあるものである。しかし、スギルは 0 でみたようにほかの品詞とも結

(2) [+gradable]とは、「段階性がある」ということを表示している。

(3) 由本は統語構造上そうした要素が見当たらないとき、動詞自身の意味において「過剰」を付加された場合に多くのバリエーションが生じることを丁寧に記述している。

(4) 「彼は彼女に愛情を注ぎすぎだ」において、「注ぎすぎ」のように名詞化されている場合に、「彼女に」「愛情を」といった格がそのまま保存されているのであり、こうした状態が起こりうるのは、格付与が統語部門において行われるということであるために、V スギルは「統語的複合動詞」だとされる。

(5) 語彙概念構造 Lexical Conceptual Structure のこと。

合し複合動詞を生産する。結合する要素を動詞以外にまで広げたとき、この由本の説明はそのままあてはまるのであろうか。

2 Aスギルについて

由本は次のように述べる。

この[+gradable]という素性は、原則として属性 (Property) に付与されるものである。属性描写する典型的範疇は形容詞であるから、「過ぎる」が「細すぎる、熱すぎる」のように形容詞とも自由に結合できることは、この TOO⁽⁶⁾の性質から当然のこととして説明できる。

この由本の指摘を尊重すれば、いずれの形容詞もスギルと結合することができるということになるだろうし、形容詞はそれのみで[+gradable]素性を既に有しているということになるだろう⁽⁷⁾。

さらにAスギルの統語的特徴もVスギルと同様である。

- (10) a このゾウは鼻が長すぎる。
b このゾウは鼻が長い。
- (11) a トヨシマの家はファミリーマートに近すぎる。
b トヨシマの家はファミリーマートに近い。
- (12) a トヨシマはミユキと親しすぎる。
b トヨシマはミユキと親しい。

(10)と(11)と(12)に見られるように、文に現れている補部はAスギルのうちの(スギルではなく)A(形容詞)によって付与されているし、Vスギル同様、スギルは補文構造を持っている([[鼻が 長 (い)]すぎる]・[[ファミリーマートに 近 (い)]すぎる]・[[ミユキと 親し (い)]すぎる])と言える。

日本語の複合動詞において、前項が形容詞である語彙的複合動詞は少ない。また統語的複合語は非常に豊富であるにも関わらず、それでも前項が形容詞である場合も少ない。統語的複合動詞における後項の動詞は「始める」「終わる」などが多く、それらは前項の動詞(出来事)に関わる動詞が多い。形容詞の意味統語的な機能からしたとき、動作

(6) LCS表示で、「過剰」の意義素を表す。

(7) 由本はスギルについて、「動詞と結合して新たな動詞概念を作り出すわけであるから、段階性のある動詞を修飾するというよりは、むしろ、どのような動詞も「過ぎる」と結合することで、ある種の「段階性」を帯びるようになる」としている。形容詞はそもそもすべて段階性を有しているので、スギルとの相性はまったくいい。

に関わる動詞との関係が困難であることが原因の一つであろう。しかし、そんな中、Aスギルの生産性が高いのはスギルは要素に「過剰」を付加するという機能を担っているから、形容詞を前項に立てることができるのである。

3 Nスギルについて

0で、Nスギルは生産性がかなり低いとしたが、

- (13) a 北越谷は田舎すぎる。
b キダはおじさんすぎる。
c カナスギはあまちゃんすぎる。
d この絵にはこの色では黒すぎる。

のように容認される例がないわけではない。Nスギルが容認される条件は何であろうか。

Nスギルは、前項要素が名詞であるということで、他のXスギルと形態・統語的に異なるところがある。Nスギルにおいて、Nが名詞であるために、その名詞はスギルの補部的解釈を受けることが期待される。しかしXスギルにおいてスギルは（統語的複合動詞であるために）既に動詞性を失効しており、スギルはそれに先行する名詞に格を付与しない。こうした形態・統語的な性質が、Nスギルの生産性を阻害する条件の一つとなっているのだろう。

しかし、こうした阻害条件があるにもかかわらず、(13)に見られるようにNスギルは観察される。ただし、(13)では容認された名詞「田舎」・「おじさん」・「あまちゃん」・「黒」は(14)のように使用されると容認されなくなる。

- (14) a *ここは茨城の田舎すぎる。
b *キダはミユキのおじさんすぎる。
c *彼はテレビでやっていたあまちゃんすぎる。
d *この絵にはこの色では絵の具の黒すぎる。

(14)では「NP1+ノ+NP2」という形態で、それぞれのNP2は指示名詞句の解釈を与えられる構造になっている。このように指示名詞句としての機能を担うと、単独では容認されていたNスギルの形態が容認されなくなるということは、(13)が容認されているのはそれぞれの名詞が、「田舎である」・「おじさんである」・「あまちゃんである」・「黒(い)」という叙述名詞句としての解釈が与えられているからであると言えるだろう。

そもそも動詞にせよ形容詞にせよ形容動詞にせよ、それぞれは（指示ではなく）叙述的な機能を持つ語であり、それに対して名詞は指示であるところと叙述であるところの両機能を担う可能性がある。Xスギルにおいて、スギルはXによって叙述された属性に対して「過剰」の意味を付加するとした時に、由本が言うように、形容詞は属性描写の典型であり、阻害を受けることなく「過剰」の意味を付加できる。しかし、名詞はその資格が付与される場合と奪われる場合とがあるのである。すなわち、元来指示的な（あるいはニュートラルな）名詞が、文中に現れる位置によって「叙述である」という機能を担った時、スギルによって「過剰」の意味が付加されることが可能となる。また、元来叙述的な名詞が、文中に現れる位置によって（その叙述的な意味が発動できず）「指示である」という機能を担った時、スギルによって「過剰」の意味が付加されないこともあるのである。もちろん、元来叙述的な名詞が叙述的な機能をもって現れれば、何の問題もなくスギルによって「過剰」の意味は付加される。また、

(15) a *この本は（値段が）3000円すぎる。

b *今日は気温が30度すぎる。

のように叙述名詞句でありながら、それが「過剰」の意味の付加を受け付けられない叙述もある。「30度」は「少し30度」「とても30度」など、由本の言う[+gradable]素性がないのである。いくら叙述的な名詞であっても、いくら叙述的な機能を担わされようと、[+gradable]素性がなければ、スギルによって「過剰」の意味は付加されないのである。(4)で取り上げた「本」・「犬」・「足」は、スギルによって「過剰」の意味の付加が困難であるのもそういったことが容認されない理由であると言えるだろう。それぞれ叙述として「本である」「犬である」「足である」という意味があるとしても、スギルを付加して「本であることが過剰である」・「犬であることが過剰である」・「足であることが過剰である」となると、その意味のさすところがわからないのである。しかし、次の例はどうであろうか。

(16) a トヨシマは顔の形が本すぎる。

b お前ってさあ、動きが犬すぎるよ。

c ヒロコって体つきが足すぎない？

一見すると容認されないように思われるが、実は俗調では(16)のように、Nスギルはかなり自由に生産される。(4)で示したように名詞とスギルの結合のみでは容認されなかった語も、(16)のようにXスギルの

X部分が補文をとり、「NP1 ガ NP2 スギル」⁽⁸⁾という形態をとった時、容認されることになる。このような構文では「顔の形が本であることが過剰である」というのは、名詞「本」が（メタファーとしての使用かもしれないが）叙文的な機能を十分に発動していると言えるだろう。

次の例も(16)の例を取り上げ述べたところと似る。しかし、これは(16)のような「NP1 ガ NP2 スギル」という構文ではなく、「修飾」ともなったものである。

(17) a *ジョンソンは人すぎる。

b *カナスギは性格すぎる。

(17)で取り上げた名詞は、「人であることが過剰である」「性格であることが過剰である」だけでは叙述としては充分でなく、「どのような人であるか」「どのような性格であるか」を伴うことで叙述としての機能を担うことができるようになる。そこで、

(18) a ジョンソンはいい人すぎる。

b カナスギは悪い性格すぎる。⁽⁹⁾

と、「人」・「性格」が修飾要素を伴い「いい人である」「悪い性格である」というように、叙述の機能が発動するに足る条件が満たされることで、Nスギルが容認されることになる。

さらに本来指示を本務とする固有名詞であっても、

(19) a このあたりの風景は駅前の感じがなんだか越谷すぎない？

b あの子の顔ってトヨシマすぎない？

c そんな風にお皿を抱えて料理を食べるとは、君は本当にウチダミュキすぎるよ。

d (片手の甲を頬に寄せて) お前、これすぎるよ。

など、「駅前の感じが越谷であることが過剰である」「顔がトヨシマであることが過剰である」「料理を食べる様子がウチダミュキであることが過剰である」「これであることが過剰である」のように言える。これは固有名詞も指示詞も（範疇化の解釈に変換されることで）叙述として使用できることの例となるだろう。

以上のことから、Nスギルが容認される条件は次のように言うことができるだろう。

(20) NスギルにおいてN位置に立つことができる名詞は叙述の解釈が与えられる場合であり、かつ [+gradable] 素性を持つ場合であ

(8) 構造は、補文であることから[[NP1 ガ NP2]スギル]となる。

(9) ただしbはaに比べて容認度は下がる。その理由については後述する。

る。

4 「名詞性」とスギルについて

加藤(2012)は、音韻的観点、形態的観点、統語的観点、意味的観点から「名詞性」という尺度を持ち込み、日本語の名詞とほかの品詞との境界を論じている⁽¹⁰⁾。加藤は、形態的観点から名詞も形容動詞語幹も副詞も一括して、「統語形態論的標示を外部に持つ語」だとしている。加藤は、統語形態論的標示の代表的なものとして、「非修飾非叙述」、「連体修飾」、「連用修飾」、「非修飾叙述」を指摘する。「非修飾非叙述」については、修飾成分にならず叙述部の要素にならないものである。「普通の名詞」は「単独では『非修飾非叙述』であり、名詞成分としての状態にあるもの」としている。「連体修飾」については、形容詞成分としての状態にあるもので、「連用修飾」は副詞成分としての状態にあるものである。ただし、「名詞+助詞の多くもこれにあたるが、『連用修飾』は『非修飾非叙述』の性質も有しており、さらに連用的な要素を重ねたり、『連体修飾』や『連用修飾』の要素を付加したりすることも可能である」としている。さらに「非修飾叙述」は「軽動詞『だ』などを伴って述部を形成して叙述部(用言)となるものである」としている。加藤が整理した次の表を見てみよう。「テレビ」「静か」「ゆったり」は、それぞれ由来としては「名詞」「形容動詞」「副詞」であるが、文の形成に貢献するに際して統語形態論的標示を「外部」にもち、以下のようにそれぞれ「名詞形」「連体修飾形」「連用修飾形」「叙述形」になるとされている。

用法	①名詞形	②連体修飾形	③連用修飾形	④叙述形
名詞 「テレビ」	テレビ__	テレビ <u>の</u>	テレビ【助】	テレビ <u>だ</u>
形動 「静か」	静か <u>さ</u>	静か <u>な</u>	静か <u>に</u>	静か <u>だ</u>
副詞 「ゆったり」	(ゆったり)	ゆったり <u>した</u>	ゆったり(と)	ゆったり <u>して</u> <u>いる</u>

(10) 小論にとってそれほど必要な観点ではないため、音韻的観点については取り上げない。

この加藤の取り扱いを肯定したとき、名詞「おじさん」・（形容動詞か名詞か判別が困難であるが⁽¹¹⁾）「冷静」・形容動詞語幹「健康」・副詞「あっさり」・借用語「ネガティブ」・オノマトペ「ゆるゆる」・句的複合語「ふわふわ感満載」・引用句「Give it up , Turn it lose」は、品詞的な分類提示は行わないが、いずれも統語形態論的標示を「外部」にもつものとして一括できるだろう。ここでこうした統語形態論的標示を「外部」にもつ形式を、「語基」と仮称しておく。語基はいずれもスギルと結合することができる。

- (21) a キダはおじさんすぎる。
b ツカゴシは冷静すぎる。
c ミユキは健康すぎる。
d あまりにもあっさりすぎて拍子抜けした。
e ミユキはいつもネガティブすぎる。
f カナスギの自己評価は、いつもゆるゆるすぎる。
g なんか、最近のトヨシマって、ふわふわ感満載すぎない？
h 小沢健二の「今夜はブギーバック」は「Give it up , Turn it lose」すぎない？

語基とスギルの結合は、加藤に倣えば、「叙述形」と言える。こうした語基とスギルが結合した叙述形を「叙述形Pスギル」と表示することにする。これは形容詞とスギルの形態論的な表示「Aスギル」や、名詞とスギルの形態論的な表示「Nスギル」とちがって、統語的な形態表示に立った表示である。(21)に取り上げた語基は、その品詞性としての名詞(a)と、名詞として統語的には扱われる「句的複合語」(g)と「引用句」(h)以外は、最初から叙述に関わるのであり、「叙述形Pスギル」を生産するのに阻害される条件はない。ただし引用句は統語中、どの要素にもなり得る。それは引用句自体、意味が特立する形態ではないことから、それこそ「名詞形」として、いずれの

(11) 形容動詞の語幹なのか名詞なのかに関する識別は古くからいろいろとなされている。小論では古くからある方法によって、とりあえず識別しておく。補部要素のときに「冷静」と「健康」について、前者は「冷静さ」というように、「さ」が必要であるが、後者はそのままの形で使用できる。（「彼の {冷静さ/*冷静} には驚かされる」「健康こそ重要なことだ。」など。）こうしたことから接辞を必要とせずに補部要素になれる語を名詞として、形容動詞（語幹）とは区別しておこう。とは言うものの、「情熱と冷静の間に」などのように「さ」を伴わない用法がないわけではない。そのため、このような扱いをした。

統語的位置にも立ち得るのである。すると、「叙述形Pスギル」の生産にとって問題になるのは、名詞のみということになる。

加藤は名詞の「名詞性」について意味的な観点からも整理し、「意味論的な名詞性序列」を次のように提示する。

非叙述的指示 > 叙述的指示 > 非叙述的範疇化 > 叙述的範疇化

左に行くほど「名詞性」が高く、一番右端の「叙述的範疇化」は「属性の表現」になっているとし、その点で「意味的に形容現象の一部と見ることは可能である」としている。さらに加藤は「形容詞も動詞（特に子音語幹動詞）に比べれば、語幹が自立性を持っており」として、用言として一括して「活用」という点で均質な形態論的現象と見ることに異議を唱えており、小論が語基としたものとの親和性を述べている⁽¹²⁾。

この整理を援用すれば、(20)で提示したNスギルの容認条件は、名詞について言えば、基本的には「叙述的範疇化」であることが条件としてあげられるだろうが、「非叙述的範疇化」とは(19)で見た固有名詞の叙述的使用の場合を言うために、この場合も容認条件として認められるだろう。

以上のことから(20)は次のように書き換えられる。

(22) 叙述形PスギルにおいてP位置に立つことができる語基は叙述の解釈が与えられる場合であり、かつ[+gradable]素性を持つ場合である。

5 スギル文と統語形態論的標示としてのスギル

小論ではここまで（Vスギル以外の）スギルによる複合動詞を「叙述形Pスギル」と表示ができることを提案し、その複合語は意味的には「Pであることが過剰である」ということを示していることを述べた。そしてそのPの条件は「叙述の解釈が与えられる場合であり、かつ[+gradable]素性を持つ場合である」と述べた。形容詞語基や形容動詞語基のようにPがそもそも叙述と関わっている要素なら問題ない

(12) 西尾(1972)は「日本語の形容詞は歴史的に途中で発展がとまってしまった観があり、これをカバーするものとしていわゆる形容動詞が発達してきている」と言う。その結果、現代語で見られるようなイ形容詞は、語彙数自体は少ない。形容詞と形容動詞とは意味的に近く、名詞と形容動詞は形態的には近い。

が、名詞のようにそもそもそうした性質が指定されていない要素の場合は、それ自身が [+gradable]素性を持つ場合か、外からそれが補填されなければならないことを、修飾要素や補文構造などの側面から述べてきた。

Vスギルに限定した記述を行っている由本にしても、Vスギル（スギル）の作用域として「主語は入らない」という指摘をしているほど、Vスギルが現れる文は主題を持つ文であることが多い。前節で述べた「叙述形Pスギル」も同様である。こうしたことから、Xスギルが現れる構文は形態的には「SハXスギル」とし、これを「スギル文」と呼んでおこう。

叙述類型論の見地から日本語の表現は二つのタイプに分かれることは古くから指摘されていることである。益岡(1987)の用語を援用すれば、「事象叙述文」と「属性叙述文」である。スギル文は基本的には「主題S」について「Xスギル」と述べる文であり、その述べ方としては、「事象叙述」と「属性叙述」とがある。Vスギルの場合は

(23) a ミユキは昨晚食べすぎた。

b ミユキはいつも食べすぎる。

a ならば「事象叙述」であり、b ならば「属性叙述」である。それに対して、「叙述形Pスギル」が容認されている場合は、Sは「過剰」の意味が付加されたPによって叙述される属性叙述である。この場合の叙述は、「Pスギル」や「連体修飾+Pスギル」や「NP1ガPスギル」という形態によってなされる。

Xスギルは（影山や由本が言うように）スギルが動詞であることから、「統語的複合動詞」であることは否定できない。しかし、「叙述形Pスギル」が全体で叙述に関わる形式であることから鑑みると、「叙述形Pスギル」が「複合動詞」と言われると若干の違和感を覚える。スギルは、「範疇を越えた広範囲にわたって『過剰』の意味を基体に付加するものとして機能している」（由本）と言うことを尊重すると、それに前接する要素を、属性叙述文の述語として「叙述形」として機能させるための統語形態論的標示の一つとして捉えるべきであろう。Xスギルは統語的複合動詞であるわけであるが、Xスギルの作用域が前接する要素Xによって決定していることや、それが現れる構文がSハXスギルであるということからも、スギルは動詞という範疇として扱うよりも、イヤナの「語尾」や、「軽動詞」ダやスルなどと同様のレベルで、（Vスギルも含めて）Xスギル全体で「叙述形」にする統

語形態論的標示であると取り扱うべきではないだろうか。

最後に、(18)の例を説明した折に「容認度が下がる」という言い方をした。次の例では、どちらも a よりも b と c の例の方が容認度が高い。

- (24) a 彼は太い腕だ。
- b 彼は腕が太い。
- c 彼の腕は太い。
- (25) a 彼は長い髪だ。
- b 彼は髪が長い。
- c 彼の髪は長い。

属性を叙述する場合、主題として取り上げた対象についての属性の叙述をするに際して、b や c のように、元來叙述しか持たない形容詞、形容動詞を使用する方が自然であろう。スギル文においてもこのことは並行的である。

- (26) a 彼は太い腕すぎる。
- b 彼の腕は太すぎる。
- c 彼は腕が太すぎる。
- (27) a 彼は長い髪すぎる。
- b 彼の髪は長すぎる。
- c 彼は髪が長すぎる。

スギル文として使用されるかどうかということと、それが使用されやすいか、とは、また違う観点であるだろう。

5 おわりに

小論は影山や由本によるVスギルについての到達した見地を援用することで、これまであまり触れられてこなかったAスギルとNスギルについての解釈を試みた。ただし、Vスギルの場合はV1位置は後続するスギルが動詞であることによって「連用形」をとるのであるが、そのほかの品詞の場合は、語基である。Vスギルは連用形であったが、動詞の「名詞形」は連用形であり、VスギルのV1は動詞なのかそれとも名詞形なのかは微妙なところである。もちろん、格付与の問題からすれば名詞であるとした格付与はできないわけだが、スギルと結合することで、Vスギル全体で格付与ができるようになるとすれば解決しそうではあるが、Vスギルを含めての解釈は今後の課題とする。

【引用文献】

- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 加藤重広(2012) 「日本語における名詞性」『日中理論言語学の新展開 ③ 語彙と品詞』影山太郎ほか編 pp.51-76.
くろしお出版
- 西尾寅弥(1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- 益岡隆志(1987) 『命題の文法 ー日本語文法序説ー』 くろしお出版
- 由本陽子(2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房

(本学教授)